

人と自然の〈あいだ〉を開くための哲学

木岡伸夫

I 〈中〉と〈あいだ〉

〈あいだ〉との出会い

〈あいだ〉というテーマと真に出会ったのは、十数年前、山内得立『ロゴスとレンマ』（岩波書店、1974年）によって。木村敏『あいだ』（弘文堂、1988年）をつうじて、この概念に関心をもっていたが、〈あいだ〉に目が開かれたのは、山内の著書によってである。山内が用いるのは、〈あいだ〉ではなく、同義語の〈中〉（中間）である。山内は、大乘仏教の祖師龍樹（ナーガールジュナ）の『中論』から示唆を受け、分けられた二つのものの中間を考える「中の論理」を構想した。

中の論理

「中」とは何か。「中とは、二つのもののいずれでもなく、それ故にそのいずれでもある」あり方である。「論理」では、A（肯定）かAでない（否定）か、そのいずれかであって、そのいずれでもないとか、いずれでもある、といったあり方は考えられない。西洋の「ロゴスの論理」では、Aと非Aのいずれかが正しく、それらの〈中間〉は考えられない（排中律）。これに対して、東洋の「レンマの論理」では、二者の中間を開く。ここに、異なる二つのものを根本から区別する「二元論」と、分けられたものの〈中間〉を認める「非二元論」（容中律）との違いが明らかとなる。

二元論とは何か

私の「風土学」は、二元論の限界を超えようとする。「レンマの論理」は、その方向への後押しになると考え、2000年代後半から今日まで十数年間、山内の哲学を導きとして歩んできた。その過程で判ったこと―「二元論」は、特別の思考というより、哲学そのもの。二元論なくして哲学は存在しえず、哲学と二元論とは〈運命共同体〉だということである。

論理（logic）の柱は「ロゴス」。ギリシア語logosの動詞形legeinは、「分ける、数える、集める」。〈ゴッチャになったものを分けて区別し、数える〉行為において、「数、言葉、論理」としての「ロゴス」がはたらく―「分別」そのもの。理性的・論理的に考えようとするなら、異なる二者を区別しなければならない。たとえば、この世界（宇宙）を動かす根本原理と、それによって動かされるもの。〈つくるもの〉と〈つくられたもの〉。この二つを分けて考えるのが、ロゴスである―「はじめに言葉（ロゴス）ありき」（『ヨハネ福音書』）。ロゴスを基本とする「愛智」、フィロソフィア（哲学）は、その誕生以来、今日まで三千年近く、この意味の二元論を一貫してきた。人が問題にするデカルトの二元論（主客―、心身―、etc.）は、古代以来の二元論の〈近代版〉に過ぎない。

二元論の反措定とされる一元論は、二元論のヴァリエーション（ex. スピノザの汎神論：「神即自然」）。「つくるもの」（能産的自然）と「つくられたもの」（所産的自然）とを分けつつ、後者から前者に還ってくるループを想定すれば、原理としての神と被造物は、ともに「自然」だということになり、一元化される―この考えは、神と人間とを絶対的に隔てるキリスト教の立場からすれば、異端そのもの。

〈中〉から〈あいだ〉へ

哲学的には〈中〉が重要だが、ほぼ同義の〈あいだ〉を用いることにした。理由は三点。

- 1) 「中」は、二元論批判に有効な概念だが、積極的な展開がしにくい。Cf. 「中庸」
- 2) 〈あいだ〉は、「合処」（アヒド）＝〈出会いの場〉。私の風土学の最重要概念〈邂逅〉（思いがけない出会い）を論じるには、〈あいだ〉が不可欠である。
- 3) 「あいだ」は流行語。「～と～のあいだ」など、使用例多数。

II 〈あいだ〉を開く

二種の〈あいだ〉

問題とすべき〈あいだ〉は、二種類ある。①〈人と自然のあいだ〉、②〈人と人のあいだ〉、である。「自然」および「人間」との接し方を、同時に考えなければならない。二種の〈あいだ〉には、相関があるけれども、ここでは〈人―自然〉を軸に考えたい。二元論の限界は、二者の中間を考えないことによって、〈あいだ〉を閉ざすこと。人と自然が〈主体―客体〉に二分され、対立関係に置かれるため、自然はもっぱら人間の支配対象、

〈資源〉と成り果てる。科学技術を主導する二元論のメリットは明らかだが、その負の側面を小さくするための理論的工夫、仕掛けが必要である。自然に関する〈視線変更〉を、以下で提案したい。⊗

「自然」の意味⊗

集合名詞「自然」には、a) 中国語「自然」→「じねん」、b) “nature” の訳語、の二義がある。大きく見て、〈二元論と一元論のあいだ〉を意味すると考えられる。これに、c) 日本語「もの」、を加味して考えたい。「もの」（物、者）には、人間とも物体ともつかぬ〈正体不明の何か〉、という意味がある（cf. もののけ）。〈a-b-c〉にまたがる「自然」と、いかに付き合うか。〈人と自然のあいだ〉を開くカギは、そこにある。⊗

「通態化」のすすめ⊗

異なる立場を往き来するという、「通態化」（trajection）は、ベルク風土学の最重要概念。客体的自然（二元論）と汎神論的自然（一元論）。この二つは、いずれか一方をとり、他方を棄てる二者択一の関係ではない。どちらかではなく、どちらも活かす途を考える必要あり。加えて、集合的全体としての「自然」以前に、それが個々に「もの」として立ち現われる局面に目を凝らし、その〈意味〉（ex. 「美しい花」）を受けとること―「もの」から「こと」へ（山内得立『随眠の哲学』に登場する「故の論理」）。⊗
以上が、〈人と自然のあいだ〉を開くための要諦である。